
しゅごキャラ！SS 歌唄サイド「アイドルの苦悩」

桐生結奈

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

しゅごキャラ！SS 歌唄サイド「アイドルの苦悩」

【Nコード】

N0042N

【作者名】

桐生結奈

【あらすじ】

あたしはほしな歌唄。日奈森あむに負けてからのあたしの人生は大きく変わった。歌手人生も1からスタート。イースターを敵に回して、まともに仕事なんて有るわけない。散々駆け回ってようやく仕事を手にした。

でもその不安がとても重くのしかかってきて

(前書き)

はじめてのしゅごキャラ！小説です。長い目で見てあげて下さい、
短編ですけどね。

とあるイラストサイトに載せたものをひっつけてきました。思い
つきで書いたためいろんなところがおかしいですが…楽しんで貰え
たら嬉しいです。

思いつきはどうなるか分からないですね…。

あたしはほしな歌唄。かつてイースターの歌手として歌っていたの。日奈森あむに負けるまではね。それからイースターを辞めて、三条さんが新しい事務所を立ち上げ、1からのスタートになった。イースターは大手なもの、当然あたしのTV出演なんてとれるわけがない。それでも歌える場所があるのならそこがあたしのステージなんだから。

交渉も全然出来なくて、三条さんも頭を悩ませてる。エルとイルも頑張つて宣伝してくれてるみたい。それでも仕事はなくて、一日中駆け回ってた。ようやく一本のライブの仕事が入って来た。チャンス到来だつて思ったわ。

以前のあたしなら躊躇なんて全く無縁だつたけど、少しばかり不安だつた。もし失敗したらつて…。プレッシャーを感じていた。

(こんな弱気なあたしは…あたしじゃないわっ！)

自分を強く持たせ、ガッツポーズし、不安を取り除かせた。イクトがいなくなつてあたしは一人でやれるんだから、と思い込ませていた。そうしなければ不安に押しつぶされそうだった。

「歌唄？何やつてんの？」

背後から声がある。この声は…日奈森あむだわ。

「アイドルも不安がったりするんだな」

呑気な言い方をするあむの隣にいる男の子。以前にも出会ったことがある。あれは確か…。

「ちよつと空海。歌唄だつて不安になることもあるんだよ？誰だつておんなじじゃん」

「へえ〜？アイドルつてさ、いつもニコニコしてるだろ？笑顔になることで不安を消し飛ばしてるのかと思つていたよ。見えない努力つてやつか」

にかつと笑いながら空海はあむに返す。

「ってあたしだって…？何よそれ…。あたしは不安になることなんて無いと思ってるの！？あたしだって女の子よ。不安で押しつぶされることだってあるんだからね。」

「歌唄の場合はツンツンで不安を消し飛ばしてんだよね！」

その言葉にあたしは隣にいる男の子より先に口を開く。

「あたしが…何ですって？あむ」

「ジロリとあたしはあむを睨んだ。あむはビククリして「いえ、何でもありません…」と低姿勢になった。」

「不安いっばいで結構だよな！俺もいっばい不安があるんだぜ」
Vサインをしながら空海と呼ばれた男の子はにかつと笑う。そんな顔で言われてもね…。」

「試合勝てるかな」とか。将来どうするかな」とか…な 先の未来は誰だって不安だろ」

「試合はともかくとして、先のことなんてまだまだじゃん？」

「おっ？日奈森、そんな風に思っていると、すぐに未来がやってくるぞ？なあダイチ」

「そうだぜっ！未来はすぐそこだあっ！！」

ダイチと呼ばれたしゅごキヤラは飛び出して行った。元気ね…。」

「そうそう 未来はすぐそこだよっ！あむちゃんっ！！」

ピンクのしゅごキヤラが続いて飛び出す。それに続きブルーとグリーンも。」

「まっあむちゃんの場合、寝過ごしてしまいそうだけどね」

「あむちゃん、頑張って下さいですっ」

「こおらあっ！！ラン、ミキ、スウはともかくとして、言いすぎですよっ！！！！」

「あははっ！」と逃げる3人のしゅごキヤラとそれを追いかけるあむ。まるで子供ね…。ってまだ子供じゃないっ！！小学生だったわね…そういえば…。」

「ほんと…敵わないわね…」

あたしはしゅごキヤラを追いかけるあむの姿を見て呟いた。こんな子どもにあたしは負けたんだから。

「どうした？アイドル。日奈森の凄さが身に染みたか？」

満面の笑みで言う空海にあたしはそんなわけないじゃないって言いなから、本音は身に染みていた。自分にはないものがあむには沢山あるから…。イクトもそれに気づいて心を開いているのかもしれない。

「どうでもいい事だと思っただけど、敢えて言わせて貰うわっ！！あたしにはほしな歌唄って名前があんのよっ！！このスポーツオタクッ！！！！」

ビシツと左手を腰に置きながら右手で空海を差す。

「スポーツおた…ってオイッ！！俺は体を動かすのが好きなだけだっ！！！！俺だっちゃんとな名前があるんだからなっ！！！！相馬空海って素敵な名前がさっ！！！！！！」

自分の名前に素敵ってつけるヤツがいるなんておかしいわっ！！そんなやりとりをばか〜んとしてるあむ。フォローするか、止めるかしなさいよっ！！

「え…っど、二人とも？こんなところでケンカしないでよね？ハズかしいじゃん…」

頬を赤く染めながら制止するあむ。それで収まると思ってたの？

「あははっ日奈森、恥ずかしがり屋だったのかよ？大声出すとスカツとするんだぜ？なあ歌唄」

爽やかな笑顔であたしに振る空海。ちよっど…いきなり呼び捨てなの？悪い気はしないけど…。

「そうね。さっきのでスツキリしたわ。最近上手く行かないことばかりだったから煮詰まっていたのかもね」

あたしは微笑みながら言葉を返した。

「なんだ、笑えるじゃんか。そっちの方が断然いいぜっ！！」

にまっつと笑いながら空海は親指を立てた。な、何よっ！あたしだつて笑えるんだからっ！！…つてあたしを笑わそうとしてた？まさかね…。

「今度ライブやるの。良かったらだけど、来て。」

あたしはそつぽを向きながら話した。面と向かってなんて言える訳ないじゃない。

「え？マジッ！？やったじゃん！！歌唄っ！！！」

あむが大喜びしてくれた。な、なによ…自分のことみたいに…喜ぶなんて…。…嬉しいことしてくれるじゃない。

「そつちの子もついでに来てくれてもいいわよ。ついでによっ！」
あたしはついでを強調した。なぜ強調しているのか分からないけど…。

「絶対行くからねっ！歌唄の歌大好きなんだっ！！凄い楽しみにしてるからね！！」

「俺もついでに行つてやるよ。ついでに…な」

あむは大喜びで言うてくれたけど、空海はついでで返ししてきた。

なんかムカつく…。ムカつくけど…大声で怒る気にはなれなかった。

「なあ日奈森、俺たち何か忘れていないか？」

空海がふと何かを思い出したかのようにあむに聞いた。

「へ？何か？…何かつて…あ…！…！…！…！…！…！唯世君っ！！いけないっ早く行かないとっ！！…！ごめんねっ歌唄っライブ頑張つてねっ！！…！！」

一目散に駆け出すあむ。唯世と待ち合わせでもしてるのかしらね。

「空海行くよっ！早くしないと置いてっっちゃうんだからねっ！！」

空海はその言葉を聞いて目を丸くした。そして駆け出した。

「日奈森、俺にそんな事言っなんて後悔すんなよ？」

得意気な顔であむに言い返す空海。凄いスピードであむに追いついていた。

「ちよっ！…？空海速すぎじゃんっ！…？？」

あまりの速さにあむはびっくりしていた。いつからこの話はスポ根になったのかしら？

「あははっ！全然余裕だし ほらっ置いて行くぞっ！！！！」
空海の全力疾走とあむの全力悲鳴をみえなくなるまで見届けていたあたしだった。

あたしの後ろで「あの二人は相変わらずなんです！」とエルが咳いていた。イルもその様子を見て「見飽きないよな キシッ」と笑っていた。

相変わらず…か。あむが羨ましく思えた。空海みたいな子がいたら落ち込んでも慰めてくれそうだもんね。背中を押してくれそう。「歌唄ちゃん、時間なんです。三条さんが帰って来て欲しいそうなんです」

「ええ、分かったわ。帰りましょ、イル、エル」
そしてあたしはあたしの戦いのステージへと戻って行った。

END

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0042n/>

しゅごキャラ！SS 歌唄サイド「アイドルの苦悩」

2010年10月8日10時32分発行